

香附子 白朮

柴胡 半夏

玄参 龍眼肉

甘草

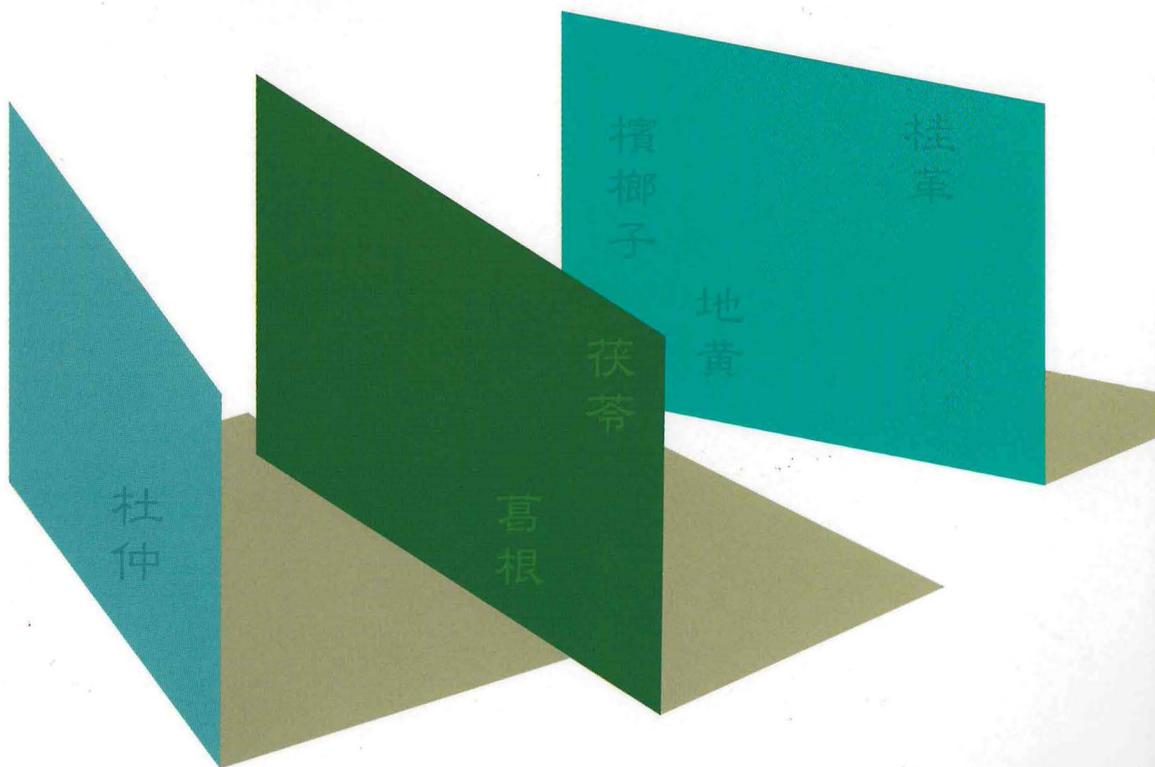
車前子

麦門冬

当帰

漢方診療二頁の秘訣

編集 富山医科薬科大学副学長 **寺澤捷年**
北里研究所東洋医学総合研究所所長 **花輪壽彦**



金原出版

050	慢性頭痛の漢方診療の工夫あれこれ	小林 豊	114
051	高齢者の慢性頭痛漢方治療	無敵 剛介	116
052	東西医学融合による血圧治療	原田 康平	118
053	ストレスによる高血圧症に対して	織部 和宏	120
054	病名で漢方薬を用いるときの注意点—高血圧に漢方を用いる勘所	並木 隆雄	122

疾患別のコツ—内科・消化器

055	厚朴・枳実と消化器疾患	小川 幸男	124
056	感冒に伴う下痢の漢方治療	中村東一郎	126
057	しゃっくり（吃逆）の漢方治療	藤永 洋	128
058	胃切除術後障害の漢方療法	岡 利幸	130
059	消化器内視鏡所見と漢方処方	及川 哲郎	132

疾患別のコツ—産婦人科

060	女性における駆瘀血剤と補剤	玉舎 輝彦	134
061	産婦人科漢方医療のコツ	原 敬二郎	136
062	月経困難症	石野 尚吾	138
063	漢方不妊治療の実際	寺師 睦宗	140
064	月経随伴症状の漢方治療	村田 高明	142
065	女性の不定愁訴，血の道症に対する漢方治療	福澤 素子	144

疾患別のコツ—疼痛性疾患

066	腰痛と漢方	竹川 佳宏	146
067	慢性の腰痛や膝の痛み	関 直樹	148
068	腰痛・膝関節痛の漢方治療	斉藤 大直	150
069	高齢者の慢性腰下肢痛に対する漢方治療	小川 秀道	152
070	皮内針三分間治療のコツ —初期のOA（変形性膝関節症）に皮内針治療—	柳澤 紘	154
071	関節リウマチ	松多 邦雄	156

072	高齢者の関節炎……煎剤を使ってみよう	高橋 宏三	158
073	緩和ケアにおける漢方治療	木下 優子	160
074	慢性疼痛性疾患への漢方治療	新垣 敏雄	162
075	頸椎後縦靱帯骨化症の症例	中田 敬吾	164
076	ペインクリニックにおける漢方診療のコツ—頭痛を例に—	粕田 晴之	166
077	痔の漢方治療	力丸 米雄	168

疾患別のコツ—腎泌尿器科

078	泌尿器科領域での漢方治療	石橋 晃	170
079	尿路の不定愁訴（女性）には	木村泰治郎	172
080	泌尿器科の外来診療	矢田 博之	174
081	慢性腎炎の漢方治療—血液透析に至らせないために—	永井 良樹	176
082	慢性腎機能障害・腎不全の治療	三瀧 忠道	178

疾患別のコツ—皮膚疾患

083	慢性皮膚疾患の診断から治療まで	二宮 文乃	180
084	帯状疱疹の漢方治療	豊田 一	182
085	アトピーにステロイドは不要—石膏が効く—	藤原 二郎	184
086	強皮症の皮膚硬化に対する漢方治療のポイント	古田 一史	186
087	私のアトピー性皮膚炎の漢方治療	村主 明彦	188

疾患別のコツ—代謝・アレルギー疾患

088	糖尿病を管理するうえで西洋医学と漢方の統合をどうする	湯原 淳良	190
089	花粉症の漢方治療	菊谷 豊彦	192
090	アレルギー性疾患の治療は早期に	渡辺 賢治	194
091	アレルギー性鼻炎に対する漢方と洋薬の併用について	武内 節夫	196
092	漢方エキス製剤併用のコツ—アレルギー性鼻炎を例にとり—	谷川 聖明	198
093	Sjögren症候群への対応	浅岡 俊之	200
094	全身性エリテマトーデスsystemic lupus erythematosus (SLE)を漢方で診る	大野 修嗣	202

アレルギー性疾患の治療は早期に

渡辺 賢治

慶應義塾大学医学部助教授

近年アトピー性皮膚炎をはじめとするアレルギー性疾患が増えている。これらに対し、漢方治療に対する期待が高まっている。しかし、アトピー性皮膚炎の増悪因子として、生活環境、ストレス、食習慣など生活習慣病的要素が多々あり、成人してから、特に社会人となってからは治療に難渋することが少なくない。そうしたことから幼児期、学童期までに治療することが好ましい。

この際問題となるのが、漢方薬の臭いと味である。特に乳児においては漢方薬を服用させることは困難を極めることも多い。小児科領域では五苓散の坐薬を用いることもある。

薬物の乳汁中への移行は西洋医学的には乳児への悪影響という観点から懸念されるが、漢方ではこれを逆手に取って治療に用いる場合もあるので紹介する。

漢方治療の原則「標治療法」と「本治療法」

アレルギー疾患などの内因性素因が関連するような疾患に対しては、まず症状を軽減するための「標治療法」を行ってから「本治療法」に入るのが原則である。例えば気管支喘息において気道の狭窄による咳嗽や喘鳴を取り除くために麻杏甘石湯や小青竜湯を与える。両者に共通の生薬として麻黄があるが、麻黄中のエフェドリンには気管支拡張作用があり、症状の軽減は速やかにみられる。症状が落ち着いた段階で柴胡剤や駆瘀血剤を長期にわたり投与して再発を防ぐ。これはその個人の証に基づき薬剤を選択するが、漢方薬を内服することで内因性素因に対して作用していると考えられる。

エキス製剤においては標治療法と本治療法とを同時に組み合わせることも可能である。例えば小柴胡湯と麻杏甘石湯などの合方は日常診療でよく用いる。

免疫のバランスは幼少時のほうが変化しやすい

アレルギー性疾患に用いる本治療法の意義として、患者の免疫に作用しているものと考えられる。Th1/Th2 バランス (図) は Mossmann らが提唱したもので、T リンパ球中のヘルパー T 細胞に異なる機能を有するサブセットがあり、Th1 細胞は IL-2、IFN- γ などのサイトカインを分泌し、細胞性免疫を賦活する。一方 Th2 細胞は IL-4、IL-10 などのサイトカインを分泌し、細胞性免疫を賦活する。Th1、Th2 細胞は生体内でバランスが破綻しないようにお互いに抑制しあう関係にある。

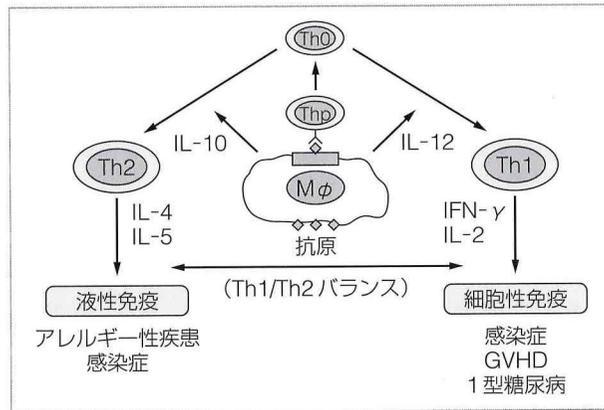


図 Th1/Th2 バランス

アトピー性皮膚炎、気管支喘息、アレルギー性鼻炎といった疾患では Th2 が活性化し過ぎたために好酸球、IgE が過剰に産生される。漢方薬は破綻した Th1/Th2 バランスを正常に戻す働きがあるが、年齢が

幼若であるほどこの免疫バランスを回復させる効果が大きい。

皮疹の状態によって薬の選択を

幼小児期のアレルギー性疾患は成人ほどこじれていないため、本治療法に重きをおいた治療になる。よく用いられる漢方薬には以下のようなものがある。

黄連解毒湯：顔の赤みが強く、ひどく痒がる。脂漏性湿疹にも効果がある。

越婢加朮湯：紅皮が強く、腫れぼったくてむくんでいるような状態の皮疹に用いる。また、学童時期にみられる痒疹タイプの皮疹にも用いられる。

治頭瘡一方：頭から顔面にかけての湿潤性の紅皮があるようなもので、滲出液が頭皮にべっとりついているような場合に用いる。便秘傾向があればまずこれを考える。

桂枝加黄耆湯・小建中湯・黄耆建中湯：乳幼児の本治療法として最も頻用される処方である。胃腸が弱くて虚弱であり、どちらかという下痢や腹痛を頻繁に訴えるような虚弱な幼児に用いる。乳児であればこれらの症状がはっきりしなくても第一選択薬として用いる。これら三方の基本処方桂枝加黄耆湯で、これに膠飴が加わったのが小建中湯、更に黄耆を加えたのが黄耆建中湯で虚していくにしたがって後者を選択する。

十全大補湯：虚勞の薬であるがステロイドのリバウンドなどで全身に滲出性の皮疹が出たときに用いる。痒みのために極端に寝不足になったときなど表面は熱をもっているが、体の芯は冷えていて、寒がる。このような状態に用いる。

人参湯：胃腸が弱くよだれが多いために口の周りの赤味が目立つ場合。

抑肝散：痢が強く夜泣きがひどかったり、痒みのためにいつもキーキー泣いているような場合に用いる。胃腸が弱ければ抑肝散加陳皮半夏を用いる。

飲ませ方のコツ

授乳中の場合には母親に投与する経母乳投与を考慮する。この場合、母親に成人量の漢方薬を飲んでもらう。親の指を水で濡らして薬を少し取り、乳児の頬粘膜につけてから母乳もしくはミルクを飲ませる方法もあるが、風邪などで短期間であればともかく、長期に飲ませるのは困難である。

ミルクや果汁に混ぜて飲ませるのも一つの方法である。ミルク嫌いになっては困るが、小建中湯や黄耆建中湯などはもともと漢方薬中に麦芽糖が入っており、飲みやすいので意外に飲んでくれる。

幼児の場合、飲み物に溶かす、お湯に溶かしてから砂糖や蜂蜜を入れる、シャーベットやゼリーに混ぜるなどさまざまな工夫をして飲んでもらっている。

漢方薬は本来空腹で服用したほうが吸収がよいのであるが、乳幼児の場合は食事と関係なく、お茶代わりにして、お風呂上がりなどで咽の渴いているときに飲んでもらってかまわない。

一度治ると再発しにくいのが乳幼児の特色

一度改善するとその後再発しないのが漢方治療の特長である。本治療法により体内の免疫バランスが変化した結果と考えられる。漢方治療終了の目安は皮疹の赤みが取れる、というのみならず、皮膚の乾燥が取れ、バリア機能が回復したのを確認して治療を終了する。Th1/Th2 バランスはアトピー性皮膚炎のみならず他のアレルギーとも関連しているために、アレルギーマーチを止め、気管支喘息などのアレルギーも発症しにくくなる。

治療期間は個人差があるが、完全に皮膚バリア機能が回復するまでには年単位で治療が必要な場合もあり、初診時に母親に十分説明する必要がある。